



村瀬 誠氏

墨田区環境清掃部環境保全課環境推進係長
1976年千葉大学薬学部大学院製薬化学科修士課程修了。1996年薬学博士。墨田区本所保健所衛生課、向島保健所衛生課などを経て現職。自治体職員有志等から成る、エネルギー問題、水問題及びゴミ問題に関する自主研究グループ、ソーラーシステム研究グループの代表や、国際雨水資源化学会都市担当理事など多方面に活動している。主な著書に『都市の水循環』1982、『都市のゴミ循環』1985（共にNHKブックス共著）『環境シグナル』1996 北斗出版、他多数。

interview

雨水利用の夢

「生命と文化を育む雨をもっと大切に、
もっと有効に利用したい」

身近な「水」について考える時、雨水のことを避けて通ることはできません。新聞記事にも繰り返しこのことが話題になっています。そこで、区役所に勤務しながらも「雨水博士」として話題になった村瀬誠さんに、雨の暮らしと文化についてうかがいました。

雨に恵まれた国 日本

村瀬さんは、さまざまな国際会議や海外活動をなされていますが、海外との交流の中から目を開かれたものがあるのではないですか。

村瀬 私は現在、国際雨水資源化学会の都市問題担当理事という役割を担っています。その関係もあって、これまでに、アジア、アフリカ、南アメリカ、ヨーロッパなど世界各地をまわってきました。どこに行っても「たくさん雨が降るあなたの国は羨ましい」とよく言われますが、本当に、「日本って雨に恵まれた国だなあ」と、つくづく思います。そのことを最も強く感じたのが、アフリカ南部のボツワナでした。この年間平均降水量は、約三百五十三ミリ。日本のそれが約千七百ミリですから、日本の約十五%足らずしか雨が降りません。しかも、降り方が極端なのです。日本は年間を通じてコンスタントに雨が降りませんが、ここでは、一年のうち四日ぐらいいしか雨が降らないのです。そのことを象徴するよつな、いくつかのエピソードがあります。まず、雨水タンクの蛇口に、鍵がかかるとようになっていました。「雨水泥棒がいるから」と言っていますね。「雨水泥棒だって！」と目を白黒させていると、「雨水タンクの盗っ人もいる」と聞いて、これまたびっくり。

この国では、雨がものすごく貴重なも

のなのですね。

村瀬 もう一つ面白いエピソードがあります。ボツワナは以前イギリスの植民地だったのですが、一九七〇年代に独立した際に、貨幣の単位をシリングからプラ（Pula）という単位に変えたんです。イギリスの植民地だったケニアやタンザニアでは、今でも貨幣の単位はシリングですから不思議に思っています。これを聞き、これまたびっくりしました。プラというのはこの国で一番大切なもの、つまり雨水／rain waterという意味だということです。ちなみに、これより小さい単位、コインの単位テーベ（Thebe）は、「雨粒／rain drop」という意味だそうです。こんなやりとりをしているうちに、はるばる日本からボツワナまで、なぜ雨水利用の調査に来たのかと聞かれたので、東京は毎年のように夏になると渇水の心配をしなければならぬからだと、答えると、「うちのように雨が少ないところならまだしも、東京はたくさん雨が降るじゃないか。その東京が渇水になるなんて、何かおかしいんじゃないか？」と言われ、これまたカルチャーショックを受けたわけです。六年前ですから、一九九三年のことです。

生命を育む雨

村瀬 今年の八月には、「究極の雨水利用」とでも言いましょうが、霧利用の調査のためにペルーに出かけました。ペルーのリマには、一年間で雨が三ミリしか降らない

です。でも近年は雨がよく降るようになってきたというので、「何ミリだい」と聞く、「十三ミリだ」というのです。これでは生きていけないではないか。水は一体どうやって確保するのだらうかと思って、「水源はどこ？」と聞く、一つは川という答えが返ってきた。ペルーはアマゾン川の源流があるところですが、ほとんどの川はブラジル側に流れて行きます。しかし、一部はペルー側にも流れるのです。リマなどの都市では、その水を利用して水をまわっています。もう一つは霧利用/フォグ・キャッチメント・システム (Fog Catchment System) だということです。山の谷あいにはネットを張って、ネットの網の目を通った霧を水滴にして捕えます。一平方メートルのネット当たり、一日三十二リットルの水が得られます。つまり世界では、一粒の雨で命をつないでいる人たちがいるのです。その人たちから見れば、日本は天国のように見えるに違いありません。

も有り難いことですね。日本は、生き物が再生可能な場所、つまりサステナビリティ/Sustainability (持続可能性) が高い地域なんですね。私たちは、この生命育む雨をもっと大切にしなければ、そのときつづくと思いました。和辻哲郎が『風土』の中で言っていますが、「日本の文化は、湿気の文化だ」というのはその通りです。吉田兼好も「住まは夏を旨とすべし」と書いています。湿気があるということは、雨が降るといふこと。その雨が生命を育てています。だからアジアは、人口も多い。バングラデシュみたいに狭い所に、日本と同数の人口が住めるということは、稲作が二期作も三期作もできるからに他なりません。

国際会議で気がついた 文化を育む雨

五年前に墨田区で行われた雨水利用東京国際会議は、市民参加型の会議だったようです。村瀬 ええ、でも当初は国際雨水資源化学会の会長から私の事務所にファックスが入って、雨水利用の国際会議を墨田区でやらないかと。と言ったもどちらかと言え、国際学会のイメージが強かったと思います。でも、市民が集まってわいわいやっているうちに、「自分達の国際会議をやる」ということになり、雨水利用の技術、政策の国際交流だけでなく、雨の環境教育や雨の文化など、国際交流もやるということ

になり、市民ならではのユニークな企画がたくさん出ました。雨の音楽祭も企画されました。ところが、雨の歌なんて世界中にいくらでもあると思つたら、意外とこれが少ないんですね。確かに「シエルプールの雨傘」や「雨に歌えは」など海外にもあることはあるのですが、歌詞の中に雨がでてくるのは、日本がダントツなんです。早い話が、演歌なんて雨と涙無しには語れませぬ。歌に限らず、日本には雨を表わす言葉も、時雨、五月雨、水雨、肘傘雨など、何通りもの表現があります。だから、雨こそ日本の精神文化の根底を表現している、と言っても過言ではないように思います。

時代劇なんかでの幽霊は、必ずと言っていいほど雨の夜に出てきます。これはきっと、周りの音が雨音で打ち消されるために、殺人者が人殺しをしまった自分と否応なく対峙せざるを得なくなるからではないでしょうか。すると、何でも幽霊に見えてきてしまうんでしょうね。ちなみにヨーロッパの幽霊は、霧のときに出てくることが多いように思います。ドラキュラなども、そうですね。ヨーロッパの多くの地域は、日本の半分ぐらいいしか雨が降りませんから。

雨の音を楽しむことも、なくなってしまいましたね。我々の世代は「雨、雨、降れ降れ、母さんと、蛇の目でお迎えうれしいな。ピチピチ、チャプチャプ、らんらんらん」を歌った世代ですが、子どもの頃、水たまりにできた波紋と音を楽しんだものでした。真夏の夕立の後には、「いいお湿りです」なんて声を掛け合いました。しかし、

今はどこもアスファルト、コンクリート、ヤングルです。夕立の後にはかえって蒸し暑くなり、すぐに「クーラーで除湿しよう」となっちゃつ。雨を楽しみ、雨に親しみ、雨を恐れ、雨を敬う、といった雨との多様なつきあい方を通じて、日本人特有の感性が育まれてきたと思うのですが、どうも日本人は、戦後この大切なものをなくしてしまつたのではないのでしょうか。

同じように、雨によって育まれた食文化も、失われようとしているように思います。おいしい酒も、酢も豆腐も、食はすべて水次第ですよ。でもいつからこうなつたのか、現代人はエロとしての水にしか関心を持たなくなつてしまった。おいしい水が飲みたいのならペットボトル入りの水を買えばいいというのが、当たり前になつてしまつた。でもおいしい水の元は、雨水なんですね。雨水が地下に浸透して、大地のフィルターを通して、長い時間を経たおいしい水が生まれます。水道水だって、元をたどれば雨水です。だから、あなたの体にも、あるゆる生き物の体にも、雨が流れている」とよく言つたのです。雨は循環している。雨は循環しながら、生命と文化を育んできたのです。

失われた雨の文化 その結果は...

こうした雨の文化が失われてきたのは、やはり、戦後のことでしょうか。

村瀬 戦後、高度経済成長期に効率優先主

義に陥ったことが問題でしょう。その象徴が都市で、雨というのは排除すべき存在になつてしまつたわけです。例えば、東京の人の考え方は、足元に降る雨は迷惑だけれど、水源地である群馬には降つてほしいというものでしょう。こんな天の邪鬼な人種は、世界中にいないでしょうね。東京ではトイレが水洗化され、降つた雨も速やかに下水道で排除されるようになって、人々はとても便利で快適な暮らしを手に入れることができるようになりました。しかし十八年前頃から、都市型洪水がたびたび起きるよつになつたのです。東京では一時間に五十ミリの大雨が降つても大丈夫なように、下水道が設計されてきましたが、それはあくまで降つた雨のおよそ五十%近くが、地下に浸透することを前提としていました。ですから、都市のコンクリート化、アスファルト化が進んだことで、雨を排除する下水道の能力を越えて一挙に雨水が集中すれば、下水道から下水が逆流するのは当然の結果だつたのです。十八年前頃といえば、東京のコンクリートとアスファルトに覆われた面積の割合（不透透域率）が、ちょうど五十%を越えた頃と一致します。今では、東京の町の不浸透域率は、八十二%にも達してしまいました。

水で天上まで水没したのです。私は、現場で立ちすくんでしまいました。私が雨水利用に関わるよつになつた、直接のきっかけはこの都市型洪水だつたのです。と言つても、私の専門は薬学ですから土木学や建築学は門外漢ですし、当時は保健所に勤務していましたが、土木や建築の部局とは無縁でした。そこで、専門、部局を越えて、都区の職員に呼びかけて、都市型洪水の処方箋を、共同で自主研究することにしました。現場主義を貫き、フランクに話し合う中で見えてきたものは、都市型洪水の本質は、地域水循環の破壊の産物だつたということです。

流せば洪水、溜めれば資源

水で天上まで水没したのです。私は、現場で立ちすくんでしまいました。私が雨水利用に関わるよつになつた、直接のきっかけはこの都市型洪水だつたのです。と言つても、私の専門は薬学ですから土木学や建築学は門外漢ですし、当時は保健所に勤務していましたが、土木や建築の部局とは無縁でした。そこで、専門、部局を越えて、都区の職員に呼びかけて、都市型洪水の処方箋を、共同で自主研究することにしました。現場主義を貫き、フランクに話し合う中で見えてきたものは、都市型洪水の本質は、地域水循環の破壊の産物だつたということです。

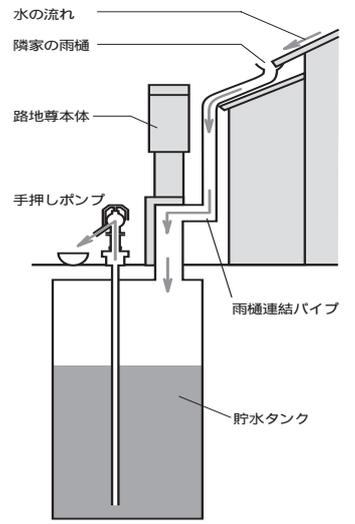
雨水を溜めてみると 楽しくなってくる

の東京は、これ以上上流のダムに頼るのではなく、自らの水はできるだけ自前で確保していくといった、水源自立の道を目指すべきではないでしょうか。東京に一年間に降る雨を七%溜めたとしますと、それは利根川上流の最大のダム、八木沢ダムの総貯水量である一・七五億トンに匹敵するので、「水源地、遠くのダムより軒の雨」というわけですね。

村瀬 一九八二年に、国技館が蔵前から両国に帰ってくる話が持ち上がりました。でも、当時両国駅周辺では都市型洪水がたびたび起きていました。私はその頃保健所で相撲の営業を許可する立場にありましたので、許可にあたって日本相撲協会に雨水利用をお願いしました。つまり、国技館の大屋根に降つた雨水を溜めて洪水を防ぎ、溜めた雨水は興行のときのトイレや冷房の水に使い、非常時には防災用水として役立てようというわけです。でも当初相撲協会は、あまり乗り気ではありませんでした。そこで上司の助言もあり、私は多くの区の仲間とともに区の職員提案制度を活用して、雨水利用の提案をまとめ、墨田区から日本相撲協会に雨水利用を申し入れてもらおうと考えました。幸い、この提案が山崎榮次郎墨田区長の目に留まりました。最終的には山崎区長が日本相撲協会の春日野理事長に雨水利用を申し入れ、結果は設計が変更さ



雨水貯水井戸「路地尊」(写真提供：墨田区)



— 雨水貯水井戸「路地尊」のしくみ —

んとの出会いが、きつかけとなって実現しました。仕組みはいたって簡単で、路地の一角に雨水タンクを埋め込み、隣接する屋根から雨水を集め、手押しポンプで押し出すというもの。普段はその水で町の緑を育て、非常時には消火や飲料水に活用します。徳永さんはこの路地尊がきつかけとなって、家庭用の雨水タンクを開発。とつとつ「水商売の道」に入り込んでいました(笑)。私自身、自宅で雨水利用をやってみて実感することですが、雨水を溜めて利用していくうちに、それまで雨が降ると嫌だなあと思っていたのが、恵みの雨だと思つように意識が変わることに驚いています！なんだか楽しくなる。節水というと、何だかケチケチ気分ですが、雨を溜めるのは貯金みたいで豊かな気持ちになる。これは、雨水利用のとても大切な効用だと思います。

国際会議の結果はいかがでしたか。

村瀬 結局、国際会議が終わって、「雨水利用東京宣言」を出し、会議のテーマだった「雨水利用で地球を救つ」を進めていく

ために、雨水利用の運動ネットワークを広げていこうということになりました。当初は六十名ぐらいで、「雨水利用を進める市民の会」(<http://www.network.sumida.tokyo.jp/amanizu/>)ができました。これできたのが、一九九五年の四月です。それから宣言文の実現に向けて、動き出したのです。毎年のように海外に出かけて、ネットワークを作っています。その年に行ったのは、中国。国際会議への参加と、黄土高原上流域の雨水利用の調査に入りました。以降、農村と都市で雨水利用の国際交流をしていこう、ということになりました。来年は、アジアの農村と都市の水危機を打開していくために、中国の農村での雨水利用と、日本の都市の雨水利用の事例をまとめ、日中で共同出版する予定です。ドイツとは、技術開発に関する交流をしています。二一年に、ドイツで雨水利用の大きな国際会議があるのですが、私もその実行委員のメンバーになっています。これは、雨水利用をヨーロッパ中に広めようというものです。

「市民の会」のほうの大きな仕事としては、雨の暮らしと文化を大成しようというところで、「雨の事典」を作ろうとしています。着手して二年になりますが、いよいよ二年の十月には出版する予定です。

「国際雨水センター」を

目指して

村瀬 これからは、雨水利用を社会の仕組みにしていく取り組みを、推進していきたい

いと考えています。墨田区は平成五年から七年にかけて、日本で初めて都市における雨水利用の普及に伴う利水、治水及び防災効果に関する政策的な検討を行いました。結果、雨水利用を一定案件のもとで普及していくと、それらに効果があることがわかりました。たとえば、三十%のビルや住宅で雨水利用を導入していくと、約一カ月間雨が降らなくても、毎日二千四百トンの水が利用できます。これは、区民一人当たり十一リットルの水を供給できるということにほかならず、防災的にも意義があることがわかりました。

区はこの検討結果を受け、平成七年に雨水利用推進指針を作成、同年に雨水利用促進制度もスタートさせました。これまでに百十五の雨水タンクが、助成を受けて区内に設置されています。現在、区内の雨水利用の総貯水量は、約八千トンになっています。

墨田区には、毎年五百〜千人ぐらいの人が、国内外から雨水利用の視察にやってきます。墨田区を参考に、雨水利用に取り組む自治体も増えてきました。そこで墨田区は、雨水利用を一層推進していくために、全国の自治体に呼びかけ、自治体レベルで雨水利用の情報交換や政策交流を行う「雨水利用自治体担当者連絡会」を、発足させました。現在までに、九十三の自治体が参加しています。墨田区の事例などを参考に、雨水利用に助成する自治体も二十五になりました。

今後、都市への人口集中が開発途上国を中心に急速に進み、二二五年には世界の

人口の三分の二が、都市に住むことになるといわれています。急速な都市化と人口の集中は、洪水と水不足を深刻化させます。私は、そういう点で、これまで雨を排除してきた東京の教訓と雨水利用の経験は、これらの問題を解決していく上できつと役に立つと考えています。

日本は、現在食糧の多くを、世界中から輸入しています。これほど雨に恵まれ、食糧再生産可能な地域が、世界中から食料を買いあさるといのは、何かおかしいと思いませんか。食糧を作るには大量の水を必要とします。川の水も元はといえばすべて雨ですから、言ってみれば日本は「世界の雨の輸入国」であると言えるのではないのでしょうか。雨の豊かな国が、世界中の雨を買いあさつていいわけがありません。二十一世紀は人口の増大により、食糧戦争が心配されています。食糧戦争とは、水戦争にほかならないのです。私は、昨年八月ストックホルムで開催された国際水シンポジウムでの招待講演で、「No more Tanks for War: Tanks for Peace.」(水戦争のための戦車はいらない。平和のための雨水タンクを)と訴えました。

今後、雨水利用を社会の仕組みにしてい



news storys of water

【雨水利用の展開】に関する新聞記事

身近な水資源としての雨水が発見されたのはいつの頃からなのでしょう。1995年頃には災害時利用の色彩が強かった雨水利用の報道も、E (Ecology) の視点の市民への浸透と共に、よりトータルな都市部における水循環のキーポイントとして、とらえられるようになってきています。水循環を取り戻すには、やはり地域の取り組みが大

事とあって、雨水利用はC (Community) の視点から、さまざまな市民・行政の活動を生み、それが全国に広がっていく様子が、紙面からたどれます。雨水利用の活動は、地域の水文化を見つめ直す格好のきっかけになっているのかもしれない。

ご紹介するのは、データベース化した水に関する新聞記事より、朝日、読売、日経、日経産業の記事の一部分です。どの記事も要約されたものです。

【雨水利用建築】

雨や生活排水、災害時に威力。地下に四日分の生活水。住都公団、神戸に復興住宅。震災の教訓を生かして雨水を利用した防災水槽を復興住宅に。住宅・都市整備公団は阪神大震災の被災者に優先的に賃貸する復興住宅の新築にあたり、防災広場や地下水槽などを備えた「災害に強い団地づくり」に着手する。全国でも初の試みで、九七年度に完成を目指す神戸市西区の西神南団地が第一号のモデルケースとなる。広場には地下水槽のほか、井戸や噴水、簡易トイレを常設。震災で水道が遮断された場合でも四日分程度の水が確保できる。

(一九九六年一月二十五日 日経)

太陽光 年間電力の三分の一賄う。雨水貯水しポンプでトイレへ。メタンガス 生ゴミを発酵させ火力に。自然エネルギーを日常生活にもっと取り入れようと、東京都国立市の技術者が自宅を舞台にさまざまな実験に取り組み、活用している。南側の屋根にズラリと並んだ太陽電池。玄関のそばには雨水タンク。裏庭に回るとメタンガスの発生装置、「村のエネルギー屋さん」を自称する、東京都国立市の桜井薫さんの自宅だ。太陽光発電の研究などを行う個人企業「エルカ」の代表。

(一九九六年二月二十日 読売)

雨水・排水 雑用水の利用進まず。小中校三割 役所庁舎一割。関東管区行政監察局は十九日までに、都内の雑用水利用の実態調査結果をまとめた。それによると、都内五十二の区市町の公共施設で、雨水や排水といった雑用水の利用施設を設置しているのは、小中学校が九十九施設

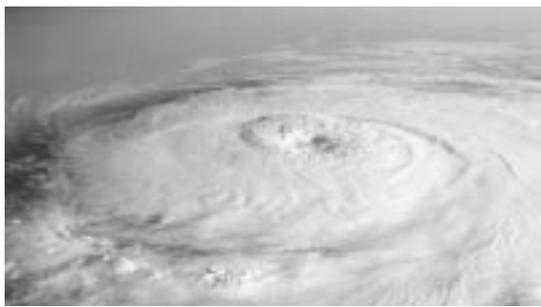
(全体の三十二・二%)。区市役所などの庁舎が三十五施設(同十・七%)、福祉施設が三十三施設(同十・一%)など合わせて三百二十八施設。うち三百三施設が雨水利用だった。

(一九九七年三月二十日 読売)

名古屋に巨大なドームが生まれ、これで、東京、福岡を加えた四大都市圏にすべてそろうたことになる。雨を恵みに変える点で、ドームは興味深い。それは、大きな屋根に受けた雨水をためトイレや植木などの雑用水に使う「都会のダム」である。雨水利用の設備費は約一億円。五百五十億円の事業費全体から見ればさほどでもない。その雨水により、ドーム全体で使う雑用水の四割をまかなうことができる。

(一九九七年三月十三日 朝日)

環境・省エネ型に關心、雨水利用住宅 五十六%。「生活排水の再利用やソーラー住宅に關心があります。大和ハウス工業が大都市圏の夫婦を対象に生活と環境について聞いたア



ンケート調査で、こんな結果が出た。(一九九七年四月二日 日経産業)

太陽光や風力で発電・雨水を池に。都営の実験住宅完成。循環型社会に対応した「エコピア実験住宅」。小動物が生息できるような水辺空間を再現した公園も造られた。雨水を地下水槽にため、それを風力発電と屋上の太陽光パネルの電力でくみ上げて池に回しており、周辺住民にも開放する。(一九九八年五月八日 朝日)

【行政による雨水利用の取り組み】

二十九自治体の知恵交換。雨水を防災対策などに積極的に活用している全国二十九の自治体が集まり、十四日、墨田区役所で「雨水利用自治体連絡会」の初会合を開いた。各自治体の担当者から活発な取り組みが報告され、今後毎年、連絡会を開いて技術・政策面での情報交換や市民団体との連携を進めていくことを決めた。この日、連絡会に参加した自治体は、都内からは都と墨田、千代田、台東、世田谷、板橋、練馬、足立、葛飾、江戸川の九区と三鷹、小金井、多摩、昭島の四市。このほか沖縄県、神戸市など全国の十五の自治体の担当者も出席した。

(一九九六年三月十五日 読売)

両国の国技館に雨水貯留装置をつけるように提案し、二年前に墨田区で開いた雨水利用東京国際会議の事務局長を務めた同区環境対策課主査の村瀬誠さんが、十四年間にわたる雨水利用推進活動の成果をまとめた論文で、薬学博士になった。「与えられた仕事を石ころで終わらせるか、ダイヤモンドに変えるかは本人の取

り組み次第ということ。若い人たちに知ってもらえれば」と村瀬さん。これからも都市の水、「三問問題解決の処方せんを世界に発信していく」という。国際雨水資源化学会(加盟四十一カ国、七地域)もこの取り組みに注目。雨水利用東京国際会議を同区役所で開催し、同区の総合的な雨水利用の考え方が、世界的にも重要な指針だ、と高く評価した。論文は三次の厳しい審査を経て合格した。主査を務めた小山泰正・東邦大名誉教授は「公衆衛生現場での体験を深く考察、調査し、政策化しようとしたもの。その活動は担当官の直接業務ではない。彼の問題発見能力解決能力、先見性が衛生薬学の分野で社会的に優れた業績をあげたと評価している。これを知った北斗出版が「運動論やネットワーク論などを、論文と合わせて本にしたい」と申し出て、単行本「環境シグナル」も完成した。

(一九九六年四月十二日 朝日)

かつて神田川の水源として豊かな水量を誇った、三鷹市・井の頭公園内の井の頭池の湧き水を取り戻そうと、都と三鷹市は、井の頭池・神田川湧水復活事業に乗り出す。ポンプアップした地下水の給水をさらに増やし、今後五年間に四千三百基の雨水浸透ますを設置して、都市化とともに減ったわき水を取り戻す計画だ。市内で六年前から運動を続けている「市政研究会・湧水復活グループ」の両角宗武代表は、池が昔の姿を取り戻し、神田川に清流が復活するには、地下水の補給に雨水浸透ますの設置が加わってこそ、効果がある、と、宅地内のますの設置を呼びかけている。

(一九九六年五月十二日 朝日)

東京都は多摩地域で下水道を活用した新しい取り組みを始める。府中市と国立市の処理場で雨水貯水池を整備するなど雨水対策を強化する一方、多摩ニュータウン内で二〇〇〇年度から再生水供給を始め、節水型都市づくりを目指す。

(一九九六年七月十三日 日経)

雨を自家用水に、自治体も助成。雨水を自宅のタンクなどに貯めて、洗濯や植木の散水などの雑用水に利用する家庭が増えている。阪神大震災の教訓やここ数年夏場の水不足で、「水の大切さ」がクローズアップされていることが背景にあるようだ。家庭や民間施設への助成制度を始め自治体も相次いでおり、雨を身近な水資源として見直す動きが今後広がると予想される。東京都墨田区でスーパーを経営する五味茂さん夫婦は今年一月に新築したマンションの地下に、千五百リットルの雨水貯蔵タンクを入れた。雨水はマンションの壁に取り付けた雨といから集められ、屋上と一階の蛇口から散水できる。

(一九九六年八月十七日 日経)



沖縄県沖縄市で八月、雨水利用に関心のある自治体や市民グループが参加して初の全国会議が開かれる。「雨水利用を進める市民の会」(東京・墨田)と沖縄県・墨田区など全国七十七自治体でつくる「雨水利用自治体担当者連絡会」が連携したもので、慢性的水不足地域での雨水の利用策などを話し合う。会議は「雨水フェア in おきなわ」。

(一九九七年三月二十四日 日経)

東京都墨田区、埼玉県川口市、神奈川県鎌倉市など全国八十三の自治体が集まり、八月に墨田区で「雨水利用自治体・市民フォーラム」が開かれる。講演のほか、自治体首長によるサミット、海外の研究者らと交えた市民レベルの情報交換会などを実施。墨田区や埼玉県内などの雨水利用先進地の現地視察もする。墨田区は九十四年に「雨水利用東京国際会議」を開催。九十六年には全国の自治体と「雨水利用自治体連絡会」を結成するなど、雨水利用に積極的に取り組んできた。

(一九九八年三月四日 日経)

雨水利用に取り組んでいる墨田区職員村瀬誠さんが十日から四日間、スウェーデンのストックホルムで世界の環境問題を討議する「ストックホルム水シンポジウム」に招かれ、世界各地の研究者らに訴える。主催はストックホルム水財団。毎年、世界の水源保護に功績があった人に「水のノーベル賞」を送っていることも知られる。

(一九九八年八月十一日 朝日)

水源保護で総合対策、六省庁が大綱策定へ。水の水源保護のための開発規制やくみ上げ制限、雨水利用促進のための補助など、省庁ごとに



バラバラの政策を体系化し、水の環境・再利用を促すような社会システムづくりを目指す。

(一九九八年八月二十日 日経)

【市民による雨水利用の取り組み】

「雨水利用を進める市民の会」(墨田区東向島)が雨水利用をテーマに、今年初めて全国から募集したコンテストの川柳部門で地元墨田区の主婦が最優秀賞に選ばれたほか、優秀賞二人も下町の女性だった。入選作を含む七十点は十四日、「すみだりバーサイドホール」で開かれる「雨水フェア」に展示する。同会は、雨水をためて植木への散水やトイレの水洗、冷房用の水などに利用するなど雨水利用を広めることを目的に、同区内の住民を中心に昨年四月に結成された。最優秀賞は、「なみなみと露地尊雨と情を貯め」に決まった。

(一九九六年七月十一日 朝日)

コラム私の見方、雨水利用、沖縄を先進地に、年間二千ミリもの雨が降りながら湯水になるなんて、犯罪

(一九九七年十一月十九日 朝日)

インドネシア・西カリマンタンでは、エルニーニョの影響で乾期が長引き、飲料水の確保問題が深刻だ。そこで雨季に降る雨水をためるタンクを各家庭に設置しようと、現地と日本の非政府組織(NGO)が寄付を募っている。

(一九九八年八月四日 日経)

雨降りやすい日、一目で分かる。雨の有効活用を提唱している墨田区の市民グループ「雨水利用を進める全国市民の会」が作製している「雨暦」の九九年版が完成し、一日から郵送で申し込みを受け付け。

(一九九八年十月一日 読売)

村瀬誠さんが書いた環境問題を解説するリーフレットが、大学生用のドイツ語教科書として発行された。村瀬さんは、同区環境保全課に勤務しながら、雨水利用の政策研究で学位を取った雨水利用の第一人者。仲間からは、「ドクトル雨水」と呼ばれている。

(一九九八年十一月七日 朝日)

【都市インフラとしての雨水利用】

ダムに頼らぬ節水の工夫。都環境科学研究所は一九九七年三月までの三年間、三鷹市の住宅団地と工場屋根、調布市内の中央自動車道の雨水配水管にそれぞれセンサーを取り付け、水質の変化を調べた。からから天気の後、雨が降る。最初に配水管に流れ出てくる水から大気汚染物質が多く検出されたが、それ以降の大半はあまり汚れていない、とのデータが得られた。汚染されていない

雨水を地下浸透させれば、土壌の浄化能力がきれいになる。地下水を育て、湧水を保つのに効果的という。調査を担当した嶋津暉之研究員は「おいしく安全な水が欲しいのなら、地下水が一番。雨水を浸透させ、節水すれば、もうダムはいらない。湯水時も農業用水でのける」。

(一九九八年一月八日 朝日)

運輸省と新東京国際空港公団は成田空港に総合的な環境対策を導入する「エコ・エアポート構想」をまとめた。地表を滑走路が覆うことで地下水位が下がらないように、滑走路わきに雨水の浸透帯を設ける。

(一九九八年五月二十七日 朝日)

落合下水処理場から供給される再生水は一日八千立方メートル。トイレの洗浄水のほか、様々な雑用水に利用され、水道水を使う貴重な水資源となっている。もう一つ、節水型の都市づくりのため注目されているのが雨水利用だ。各家庭やビルなどで溜めた雨水はミニダム並の機能を果たす。

(一九九八年七月十二日 読売)